

「虹色のチョーク」働く幸せを実現した町工場の奇跡

小松成美（幻冬舎）

川崎市内のチョークの製造会社「日本理科学工業」で働く人の7割が知的障がい者。企業の経営姿勢から福祉への取り組みや障がい者雇用の、さまざまな苦悩・葛藤といった現実が書かれています。

一人一人の理解力や能力に合わせて作業を改善に改善を繰り返し、それぞれの力が十分発揮できるよう工夫され職場の大切な戦力となり、ほとんどの人が定年まで働く。

「人は働き、役に立つことによって幸せになれる」ということを通して、さまざまな思いやりや、前を向くことの大切さなどを感じる本です。

